



酸素袋詰めによるヤマメの運搬と釣獲試験

水産技術センター内水面試験場では、丹沢水系に昔から生息している天然ヤマメ（丹沢在来ヤマメ）のフィールド調査のほか、これらの資源を増やしたり、遊漁や食用分野での活用に向けた研究を行っています。これまでの取組みでは、丹沢在来ヤマメに養殖ヤマメを交配することで飼育のしやすい「半天然魚」を量産できることがわかり、これらを渓流域へ放流した場合は河川に定着することが確認されました。

今後、遊漁での活用を図る場合には、釣れやすさや釣り味などを明らかにしておくことが重要です。そこで、今年からは酒匂川漁協の渓流部会の皆さんとともに、半天然魚を河川に放流して実際に釣ってみるという釣獲調査を開始しました（写真1）。

通常、生きた魚の運搬は活魚車で行いますが、今回、釣獲調査を行う場所は渓流の上流部のため、活魚車が入っていくことができません。そこで、ビニール袋に水とヤマメを入れ、酸素詰めして運搬することを考えました。内水面試験場から2時間程度運搬するため、安全を見て3時間袋詰めすると仮定しました。養殖業者からの聞き取りや文献の情報から、水15Lが入る大きさのビニール袋で運べるヤマメの総重量は、1.5kg程度までと

想定されました。そこで試験場において、水 15L にヤマメを 0.75～3kg の範囲で 3 時間の袋詰めを試したところ、0.75 kg であれば大丈夫であることが分かりました。

糞をして水が汚れないよう放流前には 3 日間、ヤマメを絶食して運搬しました（写真 2）。河川に放流後、ヤマメはすぐに岩の下に隠れる様子が見られました。

放流からの 2 週間の釣獲と捕獲調査でヤマメは河川に定着していることが確認できましたので、今回の袋詰めによる運搬でヤマメが弱ってしまったなどの悪影響はないものと考えられました。

袋詰めによる運搬では活魚車が入っていけない上流にもヤマメを放流できるので、調査対象の渓流域が広がったこととなります。今後、新しい視点で調査場所を選定し、釣獲調査に取り組めるのではないかと考えています。

内水面試験場 主任研究員 相川 英明

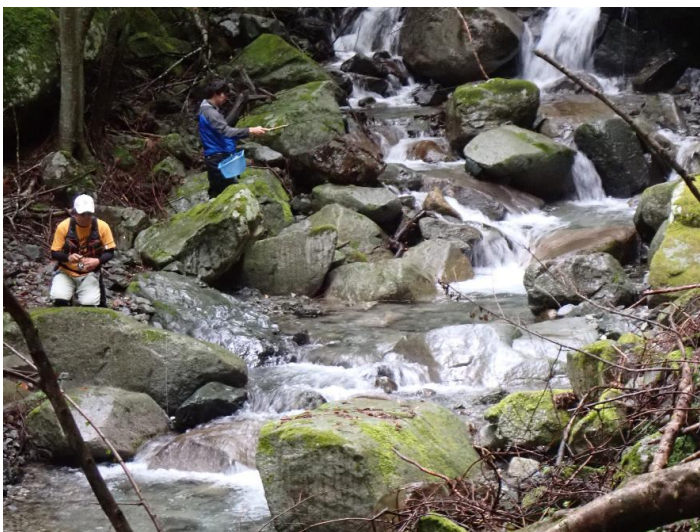


写真 1 釣獲試験の様子



写真 2 袋を抱えて運搬